

出土状況からみた中世墓における
和鏡の機能と意味

濱 喜和子

2026年3月

公益財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

出土状況からみた中世墓における 和鏡の機能と意味

濱 喜和子

1. はじめに

中世を生きた人びとは、いかなる思いをもって墓を築いたのだろうか。遺体を納めるだけでなく、そこには生者の祈りや、死後の世界への想像力といった、多様な感情や思想が込められていたと考えられる。本稿の関心は、そうした死者への想いと、副葬品としての鏡の存在がいかに結びついていたのかという点にある。

中世墓における和鏡副葬の研究は、これまで多様な視点から進められてきた。以下にその主要な議論の展開を整理する。

中世墓における和鏡の出土状況についての議論は、副葬品の組み合わせから考察を加えた秋山浩三氏が先鞭をつけた。^(注1)同氏は中世墓における副葬品の組み合わせを判明している性別が分かる墓から分析し、特に、合子や横櫛といった化粧道具と和鏡が共に副葬される事例において、これらは女性に限定される傾向があることから、和鏡もまた実用品としての意味が強まっていたと論じた。一方で、短刀や刀子等の武器類と共に副葬される事例については、呪術的性格が残存しているとし、和鏡副葬の性格を「日常性」と「呪術性」の双方にまたがるものとして捉えている。和鏡の多くは女性の化粧道具として実用的な機能を背景に副葬されたものであり、呪術的な意味はすでに希薄化していたと結論づける。

これに対し、笹生衛氏は和鏡の副葬目的を「辟邪」に求め、遺体を護るための呪術的行為として副葬されたと主張した。この研究はさらに、和鏡の副葬が12世紀後半から13世紀後半に集中していることから、この副葬の形は古代から続く信仰によって行われたと捉え、それ以降に中世的な信仰が確立すると和鏡の副葬はされなくなると指摘している。笹生氏の見解は、和鏡の副葬を宗教的な性格に位置づけるものであり、女性に和鏡が副葬されるときは呪術的性格があると秋山氏の意見と対立している。^(注2)

内川隆氏は、全国的な出土状況を整理し、和鏡を出土遺跡の性格に基づき「経塚・墓壙・祭祀遺跡・居住区画」の四つに分類した。その結果、平安末期から鎌倉期には「死者関連遺跡」からの出土が多い一方、鎌倉後期から南北朝期には「御利益を彷彿とさせる遺跡」や「信仰・祭祀に直接結び難い遺跡」といった死者と直接結びつかない場からも多く出土するよ

うになることを指摘している。その背景として、室町末期に登場する柄鏡の普及によって和鏡が化粧道具としての性格を強めていったことを挙げ、副葬性格の変化を道具の機能変化と結び付けて説明している。^(註3)

また、青木豊氏は鎌倉市内における和鏡出土例の分析を通じて、墓壙に副葬された和鏡の多くが、死者を守護し、邪を祓う目的で配置されたものであることを指摘している。これは、和鏡の配置が「単なる処理」ではなく、死者を取り巻く霊的・宗教的観念と密接に結びついていたことを示すものである。^(註4)

筆者は、和鏡の出土傾向が12世紀には経塚に集中し、13世紀には中世墓での出土が中心となり、さらに15世紀以降には居館や住居跡での出土が増加することを指摘してきた。そのうえで、出土する鏡には「経塚用に特注されたもの」と「日常使用品の埋納・廃棄」の二系統があることを論じ、こうした変化が広範囲に確認されることは、儀礼・思想が広域的に伝播していた証左であると考察した。^(註5)

和鏡が副葬される中世墓研究の主要な対立点は以下のとおりである。第一に、副葬の性格を呪術的儀礼とみるか、あるいは日常的な化粧道具の延長とみるか、という点での対立軸が明確となる一方で、一時的な流行現象とみるか、それとも思想的背景に基づくものとみるか、という意見もある。副葬の実態が具体的にどのような意味をもって選択され、実践されていたのかを空間的・構造的視点から整理した研究は限定的である。また、副葬された鏡の機能的変遷の変化については言及があるものの、それらが被葬者の社会的属性や墓域における空間的配置といかなる関係を持っていたのかについては、依然として明確な答えが示されていない。

2. 資料と方法

従来、「和鏡」という語は、「和風の文様を有する鏡」を指すものとして用いられてきた。しかし、これまで和鏡とされてきた鏡の中には、中国鏡の影響を受けたものも含まれており、その定義は一様ではない。日本風の文様をもつという点のみならず、「日本独自に発展した文様をもつ鏡」とする理解は、誤解を招く可能性があり、近年ではその用語を使用すること自体の再検討が提起されている。^(註6) 本稿ではこうした議論を踏まえ、「中世以降に出土した日本製の鏡」を便宜的に「和鏡」として扱うこととする。中世における和鏡が副葬される事例のうち、人骨が遺存していた土葬墓からの出土を対象とした。対象遺跡は近畿地方と関東地方の和鏡が副葬された中世墓70基である。出土資料が断片的で、鏡の配置や副葬状況の把握が困難な遺跡については分析対象から除外している。和鏡の副葬に関する葬送行為のあり方を出土状況から明らかにするため、本研究では分析を進める。前提と

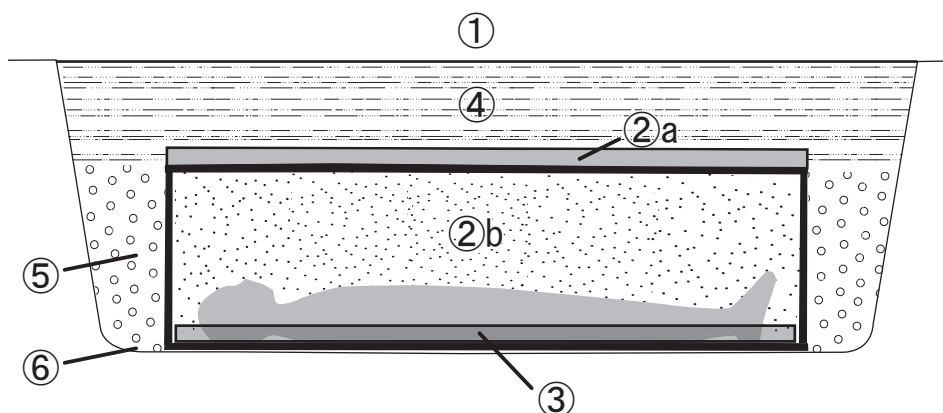


図1 出土状況模式図

して、まず和鏡の出土位置について分類・整理を行う。木棺墓の場合、和鏡の出土位置はおおむね次のように想定される(図1)。**①** 墓壙上の位置、**②a** 棺蓋上部の位置**②b** 棺蓋の下部に位置し、中間層に浮遊している状態、**③** 棺底に水平に配置された状態、**④** 上層に位置する状態、**⑤** 棺の外側かつ中間層に浮いている状態、**⑥** 棺の外側で、底部と同じ高さに位置する状態、である。これらの位置を整理すると、**①**墓壙上、**②a**を「棺上」、**②b③**を「棺内」、**④⑤⑥**を「掘形内」とする当時の副葬状況がそれぞれ想定できる。たとえば、**⑥**：棺の据え付け時、**②b③**：遺体安置時、**②a**：棺蓋を閉じた際、**①④⑤**：埋葬後の段階が想定できる。同様に土壙墓の場合にも、**③**：土坑掘削時～遺体安置前、**②**：遺体安置時、**①**：埋め戻し後、といった時間軸上の段階が想定される。和鏡が遺体の上下や棺外に置かれているという出土状況について、そもそもそれが「どの段階で」「どのような意図で」行われたのかを考察することは、和鏡の葬送儀礼における機能を理解するうえで極めて重要と考える。**②**は分類の段階では**②a**、**②b**を想定したが、分析を行う段階では**②**を現時点では分けて出土状況から判断することは困難であった。本稿は、従来研究が副葬品の組み合わせや被葬者の社会的属性に注目してきたことを鑑み、和鏡の「出土状況(配置・出土層位)」に焦点を当てる。これにより、副葬行為がどの段階で、どのような意図をもって行われたのかを具体的に分析し、中世墓における和鏡が副葬される葬送行為の一端を明らかにすることを目的とする。

3. 分析

野山遺跡群シメン坂支群^(注7) 奈良県宇陀市に位置し、丘陵の尾根上に立地している。古墳時代から近世の複合遺跡である。1号墳墳丘頂上部、標高380m付近で中世墓を1基、尾

根の先端に近い長さが25m、幅10mの範囲から総数48基の中世墓が造営されていることが明らかになった。和鏡は1号墳墳丘頂上部に営まれたSX03で出土した。和鏡を2面、土師器小皿を副葬した木棺墓が単独で営まれていた。和鏡1は棺底からやや浮いて斜になって出土し、和鏡2は鏡面を上にして棺底から出土している。土師器小皿は割れた状態で斜めになっていた。これらのうち、確実に棺内に収納されたものは和鏡のうち、和鏡2に限られ、そのほか和鏡1と土師器皿は棺上に置かれた蓋然性が高いと報告されている。出土状況の分類としては和鏡1は③、和鏡2は②に該当する。時期は墓群造営の初期の13世紀後半に該当する。

宿原寺ノ下遺跡^(注8) 兵庫県三木市に位置し、河岸段丘上に立地している。調査区中央部の西壁際より検出した。東西方向に主軸をもつ、木棺直葬墓である。墓の構造は西端を排水側溝によって失っているため、詳らかでない点も多いが、棺の東側の小口と両側板の痕跡が残っており、隅丸長方形の墓壇ぎりぎり木棺を収め、棺直上には石組みを施していたことが判明している。棺内からは、和鏡1面、鉄製毛抜き1点、須恵器碗1点、須恵器小皿2点、鉄製刀子1点、小皿状の漆製品1点及び鉄釘3点と銭貨片が出土した。刀子は棺の中央付近から、それ以外の遺物は、棺の東半からまとまって検出されている。和鏡は、2枚の木片に挟まれ、北側板にもたれかかった状態で検出された。和鏡の出土状況の分類としては、③の状態である。木片のうち上面即ち棺内側の木片には小孔1個穿たれてる。鏡面はやや上に向けた状態で出土した。また近接する小皿状の漆製品は、上下を逆転して検出されており、直下から銭貨が出土している。報告書では、東側もしくは西側が頭部方向になるだろうと推定されており、遺構の時期は12世紀後半の時期が与えられる。

有吉北貝塚^(注9) 千葉県千葉市に位置し、台地上に立地する。台地南西斜面に面した緩傾面下に位置する古墳時代後期の重複した竪穴住居跡の覆土中に約13cm掘り込まれた状態で検出された。遺物は人骨、和鏡、かわらけ小皿4枚、炭化米が出土した。人骨は保存状態が極めて悪く、頭蓋の一部と歯が出土している。頭は北からやや東の方向に向け、顔を土壇底面に接するように俯せに埋葬されていた。性別に関しては不明であるが、残存する歯の咬耗状態から成人前後の個体と判断されている。和鏡は土壇中央からやや北東寄りの場所から、鏡面を下にした状態で、床面よりやや浮いた位置で出土した。出土状況の分類としては②に該当する。かわらけ小皿4点は土壇の南西端部付近、遺体の足元付近に、まとめて置かれた状態で出土した。このかわらけ小皿4点も床面からやや浮いた状態で出土している。炭化米約19粒は、ほとんどがかわらけ小皿の付近に集中し、和鏡付近にも数粒認められた。遺構の時期は12世紀中頃から13世紀初頭である。

思井堀ノ内遺跡^(注10) 千葉県流山市に位置し、洪積台地上に立地している。全国的に見ても

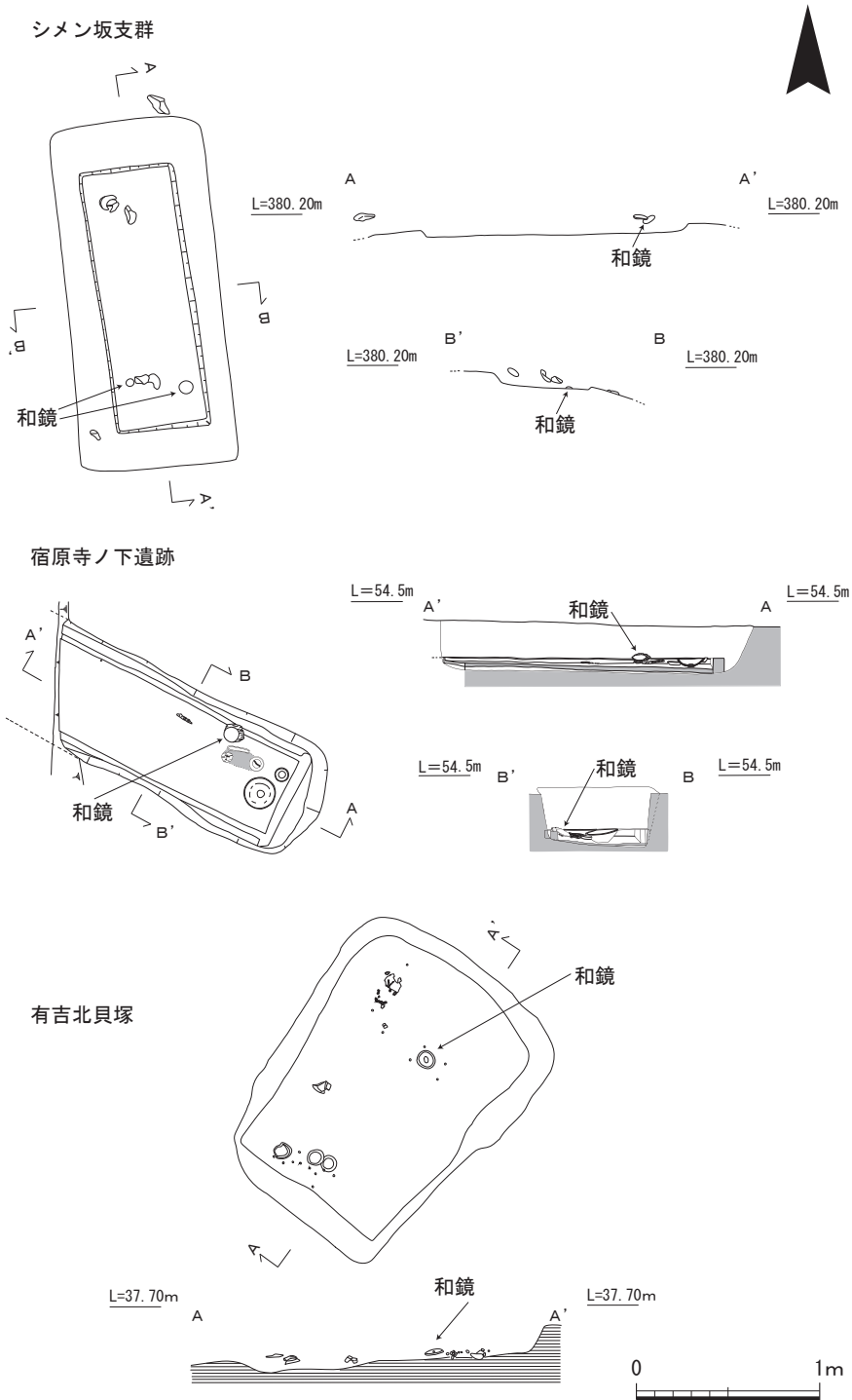


図2 遺構平面図・断面図1 (1/40) (報告書をトレースに一部加筆)

かなり珍しい方形周溝区画墓を検出し、埋葬には木棺が用いられた。遺跡南東部の台地上にあり、南側の谷を望む台地縁辺に近い場所に遺構は所在している。遺構は、方形に廻る周溝と、その周溝によって区画された墓域の中央部北側に配置された土壙墓とで構成されている。土壙墓は平面形が隅丸長方形を呈す土壙の中央に、遺体を安置した長方形の木棺を埋納したと考えられている。南側が溝に切られ、北側は後世の攪乱により上部が破壊されている。検出した結果、検出面より深さ45cm程の直方体の形で木棺痕跡が確認され、その底面から人骨(歯と頭骨と考えられる微細骨片)と副葬された和鏡、白磁、円形木製品等が検出された。遺物は底面北側から、人骨(歯24本と骨片)、白磁皿1点、和鏡1点、円形木製品1点、木櫛片約2点、棒状木製品2点、鉄釘1点、南側から青磁碗1点、青磁皿1

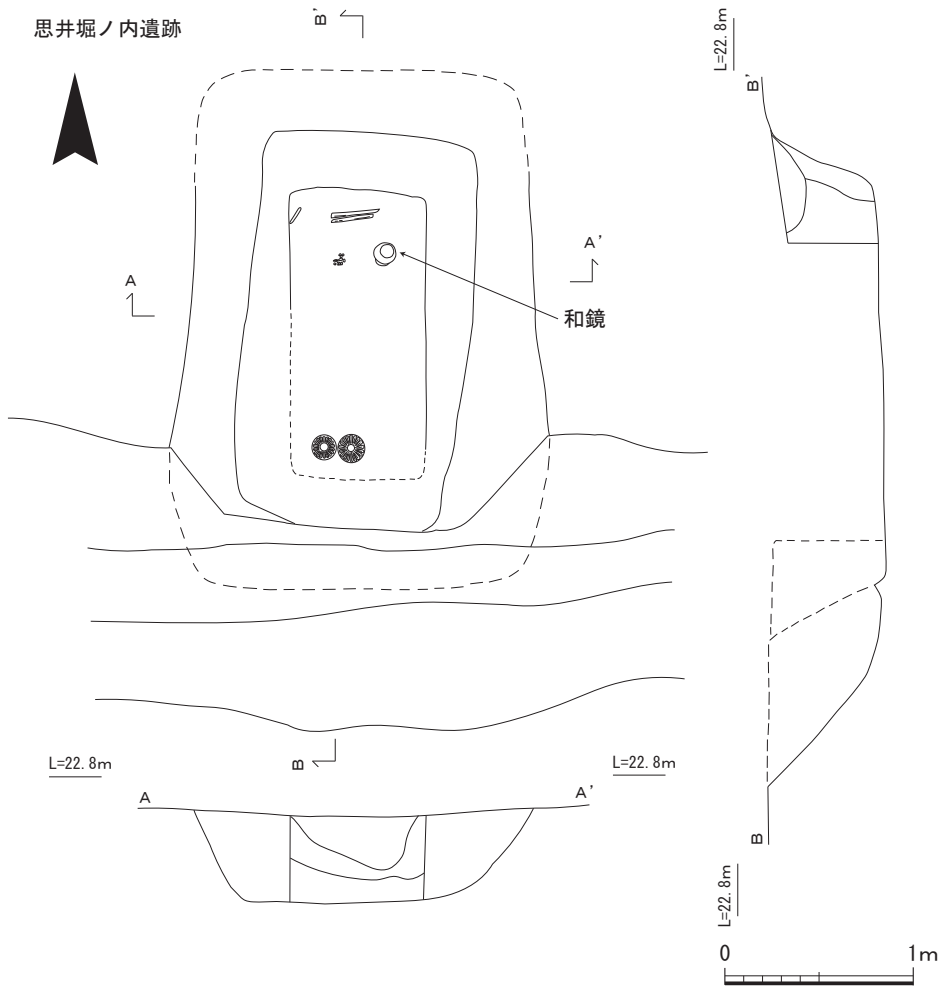


図3 遺構平面図・断面図2(1/40)(報告書をトレース・一部改変)

点が出土した。遺物の出土状況の分類としては、③に該当する。歯の鑑定結果から埋葬された遺体は壮年から熟年にかけての女性であることが判明している。時期は、13世紀後半～14世紀初頭に位置づけられる。

4. まとめ

先述した分析対象遺跡以外も視野に入れ、中世墓における和鏡の副葬について考察を行う。

まず、和鏡が化粧道具(合子・櫛)と共伴して出土する例は、釜垣内遺跡、多利前田遺跡、宿原寺ノ下遺跡、平安京右京三条三坊、福田天神遺跡、吉原三王遺跡、思井堀ノ内遺跡の7例で確認できた。一方、武器類との共伴は竹野遺跡、前田村遺跡、北島遺跡の3例に限られ、いずれも副葬品構成としては少数にとどまる(図4)。

出土状況に注目すると、木棺墓においては墓壙内に浮遊した状態(②)(例：雲出島抜遺跡、上脇遺跡)や、棺底に水平に据えられた状態(③)(例：井ノ口中川遺跡、由比ヶ浜中世集団墓地遺跡)で出土する事例が多く確認された(図5)。こ

これらの配置傾向は関東・関西を問わず共通しており、副葬行為に関する観念が広域的に共有されていた可能性がある。なかでも③に分類される事例が最も多く、和鏡が遺体安置の段階で、墓壙底面直上に据えられていたことが示唆される。また、②aや②bのような浮遊状態で出土する場合には、遺体の上に和鏡が置かれていた、あるいは埋葬儀礼の終了後に副葬されたことが想定される。副葬位置の違いは、儀礼行為の順序の違いを反映しており、各事例で副葬の手順に区別が存在していた可能性を示す。先行研究では、副葬品の組み合わせから和鏡の機能を呪術的性格か日用品的性格かに二分した議論が進められてきたが、和鏡と最も多く共伴しているのは土器類であり、副葬品の構成のみから和鏡の機能や被葬者像を類型化することには課題が残る。こうした点から、和鏡は呪術的・日常的といった従来の二項的な枠組みを超えて、宗教的あるいは思想的背景に基づく多様な目的で副葬されていた可能性を考察すべきであろう。また、出土状況の検討から、鏡面を上向きにし

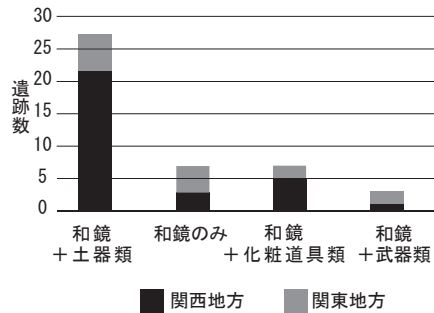


図4 副葬品別分析グラフ 1

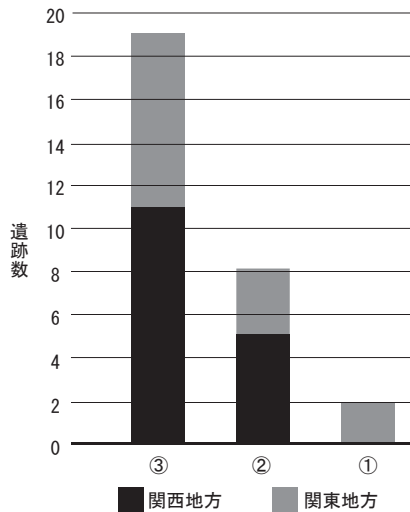


図5 出土状況分析グラフ 2

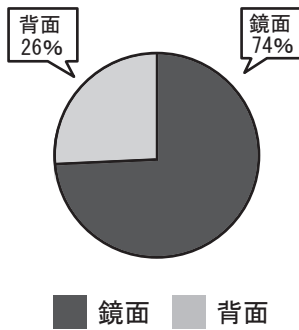


図6 出土状況分析グラフ3

て出土する例が多いことが判明した(図6)。これは、鏡の本来の機能である「映す」作用が、死者ではなく、生者や天上に向けられた意図をもって配置された可能性を示している。

和鏡は遺体の頭部・胸部付近に置かれるという笹生^(注11)の見解(②b)もあったが、本稿における事例分析では③の配置が最も多く確認された。②は分類の段階では②a、②bを想定したが、分析を行った段階では②を現時点では分けて出土状況から判断することは困難であった。今後は②aと

②bの違いをより明確に分類できる事例を増やしていくことが求められる。和鏡の配置傾向を総合すると、副葬の多くは遺体安置の段階で行われており、すべてが統一的な規範に基づくものではなく、個人的判断や慣習に基づいた多様な埋葬観が存在していたと考えられる。しかし重要なのは、和鏡が生前に用いられていた段階と、死後に副葬された段階とを明確に分けて考察することである。日用品として使用されていた和鏡が、葬送儀礼の過程で新たに呪術的・宗教的意味を付与された可能性は否定できず、両者の性格が混在している可能性も視野にいれなければならない。

(はま・きわこ＝京都府教育庁指導部文化財保護課技師)

- 注1 秋山浩三1999「古代の男性墓・女性墓－奈良・平安時代墳墓の副葬・伴出品にみる性差－」『古代文化』第51号
- 注2 笹生 衛2003「鏡を伴う中世土坑墓とその背景」『月刊考古学ジャーナル』第507号
- 注3 内川隆志2018『中世和鏡の基礎的研究 出土鏡編』國學院大學博物館
- 注4 青木 豊2020「鎌倉の中世和鏡に関する一考察」『鎌倉市教育委員会文化財部調査研究紀要』第2号 鎌倉市教育委員会文化財部文化財施設課 編
- 注5 濱喜和子2025「和鏡のもつ意味－出土遺構の違いから考える－」『同志社大学考古学シリーズXIV 考古学と文化史2』同志社大学考古学研究室編
- 注6 久保智康1999『日本の美術』第394号 至文堂
- 注7 奈良県立橿原考古学研究所1989『野山遺跡群2』(奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第59冊) 奈良県教育委員会
- 注8 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所 2004『兵庫県文化財調査報告264：宿原寺ノ下遺跡』
- 注9 (財)千葉県教育振興財団 2006『千葉県教育振興財団調査報告549：流山運動公園周辺地区埋蔵文化財調査報告書』千葉県企業庁ほか
- 注10 千葉県文化財センター 1998『千葉県文化財センター調査報告325：千葉東南部ニュータウン』千葉県文化財センターほか
- 注11 前掲注2